地球研本研究（ＦＲ）プロジェクトに係る事後評価書

２００７年　３月　１日

研　究　課　題	水資源変動負荷に対するオアシス地域の適応力評価とその歴史的変遷
研　究　期　間	平成１４年４月１日　～　平成１９年３月３１日
プロジェクト・リーダー	中尾　正義

研究目的は総合地球環境学研究所の実施方針に適合し、当初の研究計画および目的は部分的に達成された。

評価委員会のメンバーのコメントは以下の通りである。

[1] 水の利用と不足に関連する長い歴史が、特定の地域において復元された。人間と生態系の間の相互作用の好例となっている。

[2] 環境考古学の有意味な研究成果だと思える。中国における水利用の今後についての展望と政策的インプリケーションがあいまいなのが惜しまれる。

[3] 非常に興味深い研究結果である。(特に歴史的には)。しかし、では、どうするのか？というと？！農業を辞めるか？　インドでは農地の増加が、象の棲息地に及び象と人間との間に大きな軋轢が生じているが、興味深い解決策が成功しつつある。そうした解決策は？

[4] 本プロジェクトは、当初の目的をほぼ完全に達成した。が、当該オアシス地域での人間と自然の適応力の評価に関する徹底的な分析をすれば本プロジェクトの価値を高めることになるだろうと思われる。

[5] 多くの新発見は、学際的手法としての好例となるだろう。研究チームが収集した史料（またはコピー）の活用について地球研の今後の計画立案が期待される。

[6] たいへん印象深い研究でこの研究所の特長のひとつをよく表しているように思う。かなりの量の文献や資料が集められ、解析されたと思われるがこれらの資料等は今後も多面的に使われる可能性を感じる。

[7] 本プロジェクトは、すべての地域で目的を達成した上に、さらなる発展のための種をまいたすばらしい研究である。水不足の問題について、明らかになったからには対処していかなければならないだろう。

[8] 中国政府は、下流地帯に水資源を再配分した。この新しい政策のもとで、人間と自然の相互作用はどのように変化するだろう？　この点については継続して研究する価値がある。

[9] 本プロジェクトの中で、中国西部の黒河流域の山岳地の人々が、水資源の変動にどのように対応してきたかの歴史的変遷を明らかにした。彼らはその中で「生態移民」の存在についても明らかにした。また、生業のあり方と自然条件との不一致が新たな環境問題を作り出していることを示唆した。その成果は、地球研の設置目的や研究目的に合っており、当初の研究計画・目的をほぼ達成している。ただし、も

う少しオアシス地域の適応能力評価について、突っ込んだ分析があればなおよいと思われる。

[10] 理解向上と成果との結びつきについて、一般的かつ具体性のない形で述べられているにすぎない。「未来可能性」を実現するはずの本プロジェクトで、どのような重要事項が学ばれたのか、私には依然としてわからない。

[11] 優れた興味深いプロジェクトだ。情報を抽出するために史料を活用することには価値がある。今後の戦略にこの情報をどのように活用するのだろう？

[12] 本プロジェクトの調査結果は、非常に重要だ。この結果を意志決定者にどうやって伝えることができるだろう？　人間と自然の関係に一般法則を見いだすのは何であれ喜ばしいことだ。他の事例にもあてはまる重要な一般法則が本プロジェクトにはあるだろうか？　「言えるのは、歴史は繰り返しているということだけだ」では簡単すぎる。(48 ページ最終行)

地球研研究プロジェクト評価委員会委員長　　巌　佐　庸　　印

委　員　　(別添のとおり)